



半

挫

高
木
徳
一

折

挫折人生といつては余りに可哀相なので半挫折で折り合いを付けます。

こう考えた道徳（みちのり）はジャンパーを着込み、腰に毛布を巻き付け、電気ストーブを点け、毛糸の指なし手袋を嵌め、パソコンのキーを叩いてゆく。

二階の窓にはひらひらと牡丹雪の陰が舞う。

引き続き、キーは記憶細胞からの怒濤の波を文字、文章として綴り続ける。

自転車のペダルに若き力を加え、中川の飯塚橋を渡り、隣の足立区に入り、土手を上流に向い花畑川へと進路を変える。市街地を抜け、一面に広がる畑にはそよ風に揺れる菜の花が太陽に微笑んでいる。正に町名と校名である花畑に相応しい。時折、がら空きのバスに追い越される。

狭い道路沿いに平屋の家が散見され、遠くに葦葺き屋根が幾つか見えるくらい。

小川の辺にある平屋の真新しい校舎が視界に入った。広い庭を横切り、西の寄宿舎に向った。

雷のような響きに一瞬ペダルを踏む足が止まった。玄関先でスタンドを立て、ほんわかと包み込んでくれるような寮母さんに来意を告げる。

「今日は。僕は高遠武輝の兄の道徳です。弟が大変お世話になっております。着替えを持って参りました」

「それは、それは」苦労様です。確かに預かりました」

「これは母から、皆さんで召し上がって欲しい」と言いつつ、手土産を出す。

「いいんですよ、気を遣わなくて。ここには幼稚園一年、二年、小学一年、二年、三年生が四十七人もいて大所帯ですから」

「大丈夫です。数を多くと章加の手焼き煎餅百枚入っていますから」

「そうですか、有難う御座います」

ふくよかな頬に片笑窪が現れた。

「弟は元気にしてますか」

「ええ、食欲も旺盛ですし。武輝ちゃんはこの部屋で遊んでいます。でも、面会は出来ませんよ。家族に会えば、家に帰りたくなり、泣きつかれてしまいますので」

「分かります」

道徳は促されて静かに上がって、扉の小窓から覗く。身体に比較し、顔が大きい幼稚部一年の弟がおちゃんこして積み木で何かを作っているようだ。絵本に眼を吸い付けているお下げの女の子、自動車を手にして、ブーブーと発する男の子、唸るような声を出し、絶え間なく両手の指を動かす集団。壁際の大太鼓が存在感を示す。太鼓の振動が合図になるのだろうか。

十分ほどで、その場を去らざるを得なかった。

銀輪を回しながら、六歳下の弟の境遇に涙した。

母の話では、弟が赤ん坊の時に、高熱が続き、近

所で小児科医院を開業している父の従妹に診て貰った結果、このままだと命に関わるかも、また脳に後遺症が残ри、麻痺が起るかもと脅され、ドイツから入ってきた感染症の強い薬を利用すると言われ、止む無く従ったのだと。暫くして平熱に戻り喜んだという。その内、音に対する反応や呼び掛けにも応じず、女医に伝えたと、音に対する反応を把握出来ない赤ん坊だったので、遺伝なのか、病気のせいかは不明とのこと。

その後、ストマイ難聴が日本や世界各地で問題になってきて、恐らく弟もこれによると思われる。母は大学病院を巡り、検査や治療を受けさせるが、現代医学では治癒出来ず、豊唾教育を受ける以外に途はないと宣告されたそうだ。

四歳で親元から離れさせるのは忍びないが、当人のため、日常生活が円滑に行えるようにするには健常人より数倍時間が掛かるので、早い段階からの寄宿舎での仲間同士の集団生活が重要であると

専門家から指導されたとのこと。神様、何で弟と自分を替えてくれなかったのですか、せめて片耳だけでも残してくれていたらと思うと、目の前が霞んできた。

このように、日曜日には月に二度ほど寄宿舎を訪れた。この間、弟が不憫だから自分も寄宿舎に入り、そこから小学校に通うと言い張ったが、母から自分も宿泊したいが我慢しているし、他の子も孤独に耐えている、お前は自分の勉強をしつかりやれば良いと諭されたのだ。

弟が小学部に進み、二年次の授業参観に母親と一緒に出席した。十二人の児童が小柄な堀江孝之先生に算数を習っている。八十七は幾つになるかと板書し、手話で分かる人とは尋ねる。ウーウーと言いながら、五人が真っ直ぐに手を挙げた。

え、本当かよ、武輝、本当に分らないのか、こんな簡単な計算がと思うと、自分が出来ないかのように頭に血が上った。横の緋姿の母は苦笑い。

しつかりしろ、武輝。この計算は一年生で出来たと六年生の自分は咄嗟に考えた。頭脳に後遺症が残っているのか、勉強が出来る児童は遺伝などで聴覚を失ったが他の脳機能は正常に違いない。羨ましく思った。

授業が終わり、振り返った児童は親を見付け、にこやかな笑い顔になる。

芝生に座って、三時のおやつをし、当時は値が張ったバナナを剥いて弟に渡した。アーアーと唸りながら、食べ始めると、白い歯がかち合う音が一段と大きく耳に入ってくるようだ。美味しいだろうと言いつつ、頬を右手で叩く動作をした。

頷いたので、理解したのかも。

水筒のお茶も飲ませ、煎餅も与えた。

寄宿舎まで送り、別れて、バスに乗る。

小菅拘置所がある終着の綾瀬駅で下車した。車中、どちらかといえば小顔の母は同級生の阿部賢治君のでっぷりと太ったお母さんと喋っている。

続きは
完成版で
お楽しみ下さい。